



だより

—つながれ ひろがれ—

第165号
特定非営利活動法人
環境パートナーシップちば

TEL: 090-8116-4633
E-mail: info@kanpachiba.com
<https://kanpachiba.com/>

第30回「エコメッセちば2025」開催! エコメッセ30周年大感謝祭!

エコメッセちば実行委員会

オンライン開催（会場：エコメッセHP）：10月18日(土)10:00～

会場開催（幕張メッセ国際会議場）：10月19日(日)10:00～16:00

第30回となる「エコメッセちば2025」は、エコメッセ30周年感謝祭をテーマに、これまでに出展していただいた幅広い団体が一堂に会せる場となることを目指しています。また、国際会議場も利用して実行委員会企画・もったいないものバスターズも実施します。この企画はハロウィンの雰囲気の中で様々なリサイクル品を活用したり、里山の恵みを感じられるワークショップが開催されます。子供から大人まで環境に関することを体験的に楽しく学べる企画が盛りだくさんです。ぜひ親子で会場にきて、様々な企画にご参加ください。昨年大好評だった「パートナーシップbingo」も行われますし、生産者が直接販売する「SDGsマルシェ」も引き続き実施されます。また、千葉県主催の「若者が主役の環境保全活動アイデアコンテスト」も行われます。エコメッセちばはその時々

のテーマで様々な企画を実施してきましたので、この30年間を振り返るパネル展示も計画しています。初めて参加する方も、常連の方も、お久しぶりの方も、老若男女楽しめるイベントになっていますので、多くの方のご参加をお待ちしています。

「エコメッセちば2025」でお会いしましょう！

「エコメッセちば2025」の詳細は

<https://www.ecomesse.com/>をご覧ください。

「若者が主役の環境活動アイデアコンテストは、エコメッセちば会場（会議室201A）で午後開催します。参加者の投票券もあります。是非ご参加ください！」



若者が主役の環境保全活動応援事業（千葉県主催）

「若者が主役の環境保全活動アイデアコンテスト」開催します -若者たちに応援の一票をお願いします！-

日時：令和7年10月19日（日）12:30～14:30

会場：幕張メッセ国際展示場（エコメッセちば2025会場 2階201室）

「若者が主役の環境保全活動応援事業」は、今年で3年目となります。当会ではこの事業の運営を受託し、県とともに若者の挑戦を応援しています。アイデアコンテストは、9月8日に応募を締切り、13の若者団体の応募がありました。書類審査を経て、エコメッセ当日の二次審査には5団体が出場します。

若者のアイデアを楽しみに、コンテスト会場での若者のプレゼンテーションを是非聞いていただき、投票をお願いします。1位から3位の団体には賞金が授与され、受賞後具体的な活動が始まります。コンテストに出場する5つの団体の企画書は「エコメッセちば2025」の会場内に掲示します。また、当会ブースでは若者応援事業の紹介と、令和6年度受賞団体の受賞後の活動紹介を設けています。令和5年度受賞3団体もエコメッセに出展しています。ぜひ若者たちの活動を聞いて、アドバイスや具体的なご支援をお願いします。

本事業では、若者を応援する企業及び市民団体等を募集しており、現時点で77団体登録頂いてお

ります。現在も募集中ですので登録を是非お願いします。

*夏休み期間中、下記の応援団体に、若者の現地体験機会を受け入れて頂きました。ご協力いただいた団体が考える環境課題や解決方法に触れ、若者ならではのアイデアにまとめられたと思います。

- NeweZ 株式会社(君津市)
- （一社）ちばもり(長南町)
- On Re.Project (市原市)

(文責：桑波田 和子)



令和6年度アイデアコンテスト受賞式

ユース活動の場発見！ —ユースボランティア2025報告—

「ユース活動の場発見！」は、環境パートナーシップちばの活動の3つの柱の1つである人材育成、特に若い世代の人材育成のために、夏休みの時期に環境団体が各地で行っている活動を、高校生や大学生の若者たちにボランティア体験の場として提供するというものです。今年で5年目です。

まず、ボランティアの学生さんの受け入れ団体の募集です。今年度は5つの団体さんから全部で19プログラムの受け入れのお申し出がありました。今までの実績から大学生の応募は少ないため、2025年は募集は高校生に絞り、6月に県内の全高等学校の科学部担当の先生宛てに、校内の周知をお願いする手紙を出しました。同時に、環バのHPにも募集、受け入れプログラムの開催日・内容等の情報を掲載しました。

その結果、今年度は8つのプログラムに高校生26名と中学生1名が参加してくれました。高等学校

は6校から11名～2名の参加があり、これらの学校では先生方から生徒への働きかけをいただけたと思います。

参加希望があったボランティア活動8プログラムの中では、ハゼ釣り体験とごみ拾い・プラゴミアートに半数以上の応募がありました。活動内容のほか、活動場所へのアクセス方法も応募に影響していることが考えられました。里山保全活動などは、通常は交通の不便な場所で行われるので、募集の際にひと工夫が必要かもしれません。

参加した生徒さん達には、ボランティア証明書を発行し、参加した感想もお聞きしました。初めて参加という人がほとんどでしたが、全員が、楽しかった、参加してよかった、と書いてくださいって、スタッフ一同、今年もやってよかった、と思いました。

(広報)

第42回関東地区大学教育研究会に参加しました

去る9月の環境パートナーシップちばの運営会議の中で、SDGsの現在の状況と今後についての関心が出た際、この研究会で「大学のSDGs活動をレビューし、beyond SDGsについて考える」というテーマが取り上げられるということを知り、2025年9月25日（土）に会場の文教大学 東京あだちキャンパスまで、桑波田さんと中村で出かけてきました。

第一部は総会で、部外者ながら参加してしまいましたが、研究会のことを少し知ることができました。過去には「安全保障をどう教えるか—国内におけるタブーと国際環境の激変—」「教養教育としてのサイエンス—市民のリテラシー—」など、興味深いテーマでの研究発表もあり、大学や専門性の枠を超えた研究会として活動されていることがわかりました。

研究会の自由研究発表の一つが「SDGs extending or post-SDGs?—18番目の開発目標に求められる要件—」という題で、筑波大学の加藤毅氏の発表でした。まず社会はSDGsの17の目標やその枠組にとらわれ過ぎている。それぞれの人が必要とする目標をとらえフォーカス的に考えるスタンスが大切。日本は先進国の中でもGDPの底辺国になってしまっているが、そんな日本で何がサステナブルなのか。さらに大学では余力でSDGsを取り扱っている。しかし、そもそも現状の大学経営が大変厳しいので、まず（社会の）プラットフォームである大学への支援を強化し、大学自体が持続可能であることが求められる。それが18番目の目標の要件であると、加藤氏は提案されました。

その後、SDGsシミュレーションゲームを体験しました。ファシリテーターの小林勝法氏（文教大学国際学部）の説明もあり、ゲームを通して世界を疑似体験することができました。ゲームの前半は個人の夢の実現の個人的な損得に執着して「経済」優先の世界になり、後半で世界全体の「経済」「社会」「環境」のバランスを考えどのように行動するか、他者の持ち物とトレードできるように交渉もありで、バランスのよい世界に近づきました。過去の体験者の感想では前半と後半の気持ちの変

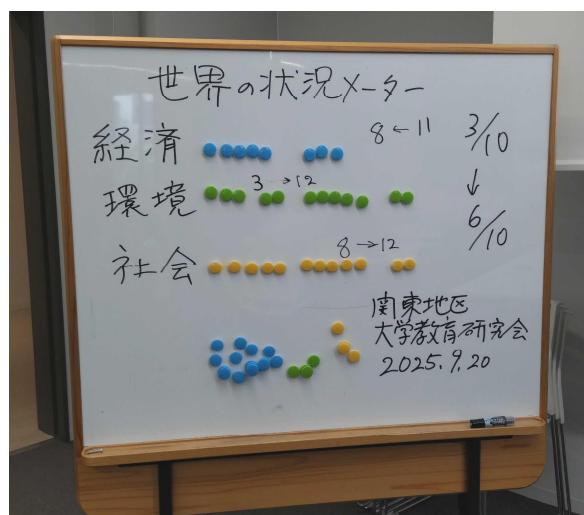
化のきっかけは、中間発表やある人の呼びかけなどだったそうです。

最後は①高大連携・接続（大学入試）②カリキュラム③学生活動支援（アワード等）④マネジメントの4つのテーマでの話題提供後、4人1グループでディスカッションをするというものでした。私は大学部外者なので、大学教員の方々の生の声が興味深く新鮮でした。出された意見はオープンキャンパスや入試のあり方、文系理系という枠の弊害（学部と院では別の系を選択することが求められる国もあるそうです）、大学経営の危機。公立と私学の違い等々。これらは国の政策に大いに関わることで大学側だけの問題ではありませんが、このままではいけないという危機感も共有されていました。

「地域社会と共に新たな価値創出の取組み」「スタートアップ育成に向けた新たな取組み」「組織的な産学連携の取組み」などが、大学に求められる「持続可能」であると整理されました。

2030年まであと5年という今、当初の盛り上がりは色あせ、少し疲れた感じもします。国も社会も貧しくなり「貧すれば鈍する」で、手の打ちようがあるのかと絶望的な気持ちにさえなります。ですが持続可能という概念は、都市市民が跋扈する以前、自然と密接に暮らしていた頃には当たり前で不可欠なことだったと思います。そういう潜在意識のようなものを、人間はもっと思い出して、「初心に帰る」ということも大切なのだろうと思いました。

（文責：中村 明子）



SDGs シミュレーションゲーム

古くて新しい情報発信の場

～新たな情報発信の場としての学会・研究会・学習会活動について～

我々市民団体が行っている事業の多くは、それぞれ対象の異なるイベントの企画・運営です。いずれのイベントも広報・PRが鍵を握っており、対象となる年代・世代・団体種別・事業分野などは様々です。本来はそれぞれに適した広報PR方法があるのですが、現状はそうした広報戦略なく、一様なチラシとメールとHPへの掲載という手法でのみPRを行ってきました。中でも学生向けの企画は、直接学生に発信する情報媒体がなく、イベントの集客が大きな課題となっています。

そんな中、先生方や大学関係者・教育業界関係者に対して学生向けの事業をPRすることで、間接的に学生達に情報を発信するという方法もあります。

そういう視点から、9月20日に関東地区大学教育研究会(ホームページ: <https://kantodk.wordpress.com/>)の第42回研究会に参加して、グループディ

スカッションの③学生活動支援(アワード等)の中で、桑波田代表が「若者が主役の環境保全活動応援事業」の紹介を行いました。

この事業は、自治体がNPO団体に運営を委託している表彰事業という形で運営されています。一般的な表彰は学内や学協会・財団などが運営を担っていますが、こうした形で実施されているケースは全国的にも珍しいものです。

桑波田代表の学生活動支援事業の紹介は参加した学校関係者に注目され、研究会の後の懇親会でも"うちの学生団体でも応募できるのか?"という質問を複数の方から頂きました。小規模な学会・研究会であったとしても、事業対象者(学生)に近い関係者へのPRの場として積極的に参加して、地道に情報発信を続けて行く必要があると考えます。

(文責: 谷合 哲行)

いすみ市で大学生がオーガニック古民家カフェに挑戦

オーガニック専門店「いすみや」代表 手塚幸夫

将来の夢と古民家

6月中旬、城西国際大学の国武陽子教授がいすみ市のオーガニック給食と生物多様性戦略について情報を得たいとゼミの学生を連れていすみ市にやってきました。会場の「嬉嬉 KiKi」という築140年の古民家での交流会の席で、3年生の成川聖矢さんから「将来カフェのオープンしたい」という夢が語されました。するとオーナーから「夢と古民家をドッキングさせたらどうですか」との提案があり、大学生古民家カフェが動き出すことになりました。

有機学校給食とカフェのメニュー

ゼミの活動方針から、オーガニック給食との結びつき、地域の人との交流がカフェのコンセプトになりました。ゼミの学生たちは、夏休み後半を返上してメニュー作りとレシピの開発を進めたそうです。

9月10日、「ききびより」と名づけられたカフェ

がオープンしました。有機カレーとかき氷、有機紅茶・コーヒーなど、すべて好評のようでしたが、とりわけ6チームに分かれてコンテストをして完成させたカレーが大好評のことでした。

4日間の営業を振り返って

カフェを人が交流できる場にという学生たちの思いは果たされたように思います。メモ用紙を片手に、子育て中のママさんに、小中学生に、近所のお爺ちゃんお婆ちゃんに、有機野菜の生産者さんにと感想や意見を聞いている姿はとても新鮮で印象的でした。

国武さんは、このゼミの魅力は「学部を越えて参加できるので、環境問題と地域課題を結びつけながら実際に地域の人と交流をできること」だと言います。

4日間を振り返って、域学連携～地域とのパートナーシップの一つの形が示されたのかなど感じています。

千葉市公民館講座報告 一 葉っぱのフロッタージュ 一



この夏は、4回公民館講座を行いましたが、今回は7月31日（木）誉田公民館で行った「葉っぱのフロッタージュ」の報告です。

参加者は小学校1年生から6年生までの13名でした。この講座はダンボールのリサイクルがテーマで、ダンボールをスタンド付きのキャンバスに仕立て、葉っぱをこすり出して絵作りをするというものです。

さて、私たちの暮らしにはダンボールが欠かせません。ダンボールに梱包されている商品はたくさんあり、ネットで買う商品もダンボールで送られてきます。お店に並ぶ商品も、ダンボールで梱包されて運ばれてきます。日本ではダンボールの回収率は95%以上とされ（段ボールリサイクル協議発行リサイクルパンフレットより）、リサイクルの優等生です。使い終わったらきれいな状態で、資源回収のルールに沿ってリサイクルすることが大切です。また、ダンボールの断面の構造が強度の秘密で、商品の大きさや重さ等に合わせてダンボールの種類を選ぶこともできる利点も説明をし、厚みの違うダンボールの実物も紹介しました。

次にフロッタージュです。子ども達に持ってきてもらった葉っぱや私たちダンボールのリサイクルマークのものも併せ、色々な形の葉っぱをしばし眺め、選んだものを障子紙の下において、クレパスでこすり出します。クレパスの持ち方や力加減が重要です。いくつもこすり出したら、切り抜いて台紙の上にレイアウトして貼り付けます。たくさんの葉っぱを貼り付けたり、葉っぱと文字でメッセージを持たせたり、葉の形をうまく生かして龍の絵を作り出す子もいました。夢中になって一所懸命に取り組む子ども達の姿は、準備などで汗をかいた私たちを癒してくれました。



（文責：中村 明子）

千葉市公民館講座報告 一 紙漉き 一

2025年7月30日（水）千葉市川戸公民館、8月2日（土）黒砂公民館で小学生を対象に「リサイクル工作 紙漉き体験をしよう！」を行いました。導入を小倉さん、SDGs、3Rのお話と紙漉きの実技を中村さんが担当しました。川戸公民館は1年生から6年生まで14名の参加がありました。また、ボランティアの募集をしたところ、高校生が参加してくださり、準備から、後片付け、子供たちへのサポートと一所懸命活躍してくれました。8月2日の黒砂公民館は昨年も実施の予定でしたが台風で中止となり、今年も台風の予想がでて、直前まで実施できるか心配しました。実際は暑いくらいの良い天気となり1年生から5年生までの9名の参加がありました。どちらの公民館も定員以上の申し込みがあったそうです。

この紙漉きは、特別な道具がいらず家にあるものを使ってできるので、家に帰ってからもやってみ

たい気持ちになります。ひもで形を作るのも、○になったり星になったり、動物の形になったりと子供それぞれの独創性や個性が出て、見ているほうもワクワクしてきます。付添いの大人の方も作ってみたいとのことで、大人向けにはどんなものが作れるかの質問もありました。

SDGsは高学年になると学校でも習うようで、言葉は知っている子供はいますが、なかなか実践に結びつかないのが実情のようです。このリサイクルもSDGsの1つであり、身近なところから取り組めることを理解して、家庭内での親子の会話の中でリサイクルや3R、SDGsが話題になると嬉しいです。

今回は工作のお手伝いをしましたが、夏休みのモノづくりは楽しいと感じた講座でした。

（文責：谷口 路代）

第29回手賀沼流域フォーラム2025年度 子ども向けワークショップ ～これからどうする？アカミミガメとアメリカザリガニとのつきあい方～ 美しい手賀沼を愛する市民の連合会 小倉 久子

2025年9月6日に行われた標記ワークショップ（以下、ワークショップ）は、会場とした手賀沼親水広場内のミニ手賀沼にわなを仕掛け、実際に捕獲したアカミミガメやアメリカザリガニを観察しながら、（条件付き特定）外来生物との付き合いを考えよう、という内容だったので、生物好きの子どもたちに大人気。30名の定員は募集開始後すぐに埋まってしまいました。講師は、認定NPO法人生態工房の片岡友美さんです。開催日前日は台風15号通過と重なったため、講師とスタッフが大雨の中で、イワシ等を餌にしたわなをミニ手賀沼に仕掛けました。当日は台風一過の好天に恵まれ、参加者全員が見守る中を、前日仕掛けたわなが次々と引き上げられていきました。岸沿いの10個のアナゴカゴは空っぽでしたが、池中央部に仕掛けたカニカゴにはアカミミガメ1個体（メス）とクサガメ2個体（オスとメス）が入っていて、関係者一同、胸をなでおろしました。

残念ながらアメリカザリガニは1尾も捕獲できま

せんでしたが、ヘラブナ、テナガエビ、カダヤシなども一緒に採れたので、いろいろな在来種・外来種についてのお話もしていただきました。

子どもたちは、配布した軍手をはめて、カメの甲羅を触ったり、両手で持ち上げて観察したり、水槽や観察ケースに入れた魚たちをじっと見入っていました。

観察の後は水の館の研修室で、環境省の動画を見たり、自然界に「悪い生物」はいない。勝手にその生きものを捨てたり放したりした人間のほうが悪い！というお話を聞きました。半日の短い時間でしたが、中身の濃いワークショップとなりました。



「手賀沼モグリウムワークショップ」を手賀沼流域7市で開催

手賀沼流域フォーラム実行委員会 竹内 順子

「手賀沼流域フォーラム」は、市民活動団体、手賀沼流域の7市、手賀沼水環境保全協議会が実行委員会を構成し、市民が主体となり、行政と協働でさまざまな事業を行っています。「手賀沼の生物多様性をともに考えよう」をメインテーマとして、2025年度は4つの全体企画と23の地域企画（各地域：流域市で企画・実施するイベント）を開催中です。今年度は新しい試みとして、流域7市すべてで「手賀沼モグリウムワークショップ」を開催しました。

（7/22 流山市、7/31 鎌ヶ谷市、8/6 印西市、8/15 白井市、8/18 我孫子市、8/20 松戸市、8/25 柏市）手賀沼はかつて水草の宝庫でしたが、現在は水質の悪化とともにすべての沈水植物が消滅してしまいました。生きもの豊かな水辺環境を流域全体に取り戻すため、小学生の親子にモグリウム（沈水植物を栽培する水槽）でガシャモク（手賀沼由来の水草）を育ててもらい、生きものたちのにぎわいを創り出します。

各会場では講師の林紀男さん（千葉県立中央博物

館）のご指導のもと、30L入りのポリエチレン樽の中に「ガシャモク」の苗を植えた植木鉢を沈めてモグリウムが出来上がり。総参加者104名で、全部で68個のモグリウムを作りました。

これを参加者がそれぞれ持ち帰って育てます。秋には参加者が育てた「ガシャモク」の観察記録を送ってもらい、その後の生育状況をパネルにし、我孫子市生涯学習センター アビスタでパネル展示をし、流域市民に報告します。

手賀沼流域フォーラム実行委員会はこの取り組みで、「ガシャモク」復活に向けた市民のつながりを作り、将来、手賀沼の水環境が改善されたときに、市民の手で保全された「ガシャモク」を沼に戻せるようにしていきたいと考えています。



白井市にて（8月15日）

講演『四街道市から「生物多様性」を窺う』で伝えたかったこと

東京情報大学 / (公財) 佐倉緑の基金 原 慶太郎

猛暑が続く2025年8月27日に四街道市自然環境保全地区選定記念講演が開催された。四街道市では第3次四街道市環境基本計画(2024年)に基づく重点取組として「自然環境保全地区」制度が始まった。四街道市の環境審議会や都市計画マスター プラン策定委員会に関わるなかで、四街道市における自然環境の特徴や魅力、そして危うさを感じていたので、その辺りを市民と担当の職員の方々にお伝えしたいと考え、講演を引き受けることにした。事前に事務局から標記の演題をいただいた。

この自然環境保全地区制度は、四街道市に残る保全すべき貴重な自然環境のうち特徴ある地区を保全地区とし、市と地権者、そして市民によって、将来にわたって維持し次世代に引き継ぐ取組である。講演では、その背景となる考え方を中心として「ネイチャーポジティブ・持続可能性・ウェルビーイング」というテーマでお話しした。以下、その概要である。

最近、メディアで「ネイチャーポジティブ」という言葉を目にするようになった。2022年、生物多様性の保全に関する国際会議 COP15で昆明・モントリオール生物多様性枠組が採択され、2030年までの目標として、「自然を回復軌道に乗せるために生物多様性の損失を止め反転させるための緊急の行動をとること」が掲げられた。「陸と海のそれぞれ少なくとも30%を保護地域及び OECM (Other Effective area-based Conservation Measures:保護地域以外で生物多様性の保全に資する手立て)として保全すること(30by30)」が謳われている。

講演では、これらの施策の骨格となっている「生物多様性」の考え方と重要性について解説した。まず、持続可能性(サステナビリティ)の考え方とその意義について説明し、その実現のために重要な車の両輪である、気候変動対策と生物多様性保全の意義について述べ、生物多様性の保全がなぜ大切なのかを生態系サービスの観点から説明した。四街道市の生物多様性を保全するためには里山の維持管理が不可

欠である。かつては、農林業が営まれるなかで育まれてきた生き物たちを、農林業が縮小するなかで、それに代わる下草刈りや樹木の伐採などを、地元の方の力や知恵をお借りしながら、街中に住む人たちが担って行く必要がある。これまでの里山保全活動は、自然や生き物が好きな人たち(バイオフィリア)が中心となって維持されることが多かったが、里山にこれまでとは異なったより多くの人たちを呼び込むためには、里山を新たなコモンズ(共有地)と位置付け、そのなかで子育てや健康のためのウォーキングなどを楽しむ人たちにも保全活動に参加していただくような仕組みづくりが求められる。良好な自然環境や貴重な生き物の保全のために、市と地権者と市民が手をたずさえて、里山としての保全地区を維持管理していく新しい仕組みをお互いの知恵を出し合いながら作っていかなければならぬ。

地球の生き物は、およそ40億年前の共通の祖先から始まる生命(いのち)をつないで現在に至っている。生物多様性のもつ意味を再確認し、里山の保全に参加し、仲間と一緒に汗を流し、生き物たちの生命の連鎖をつなぐことに喜びを見出しができたら、健康にも役立ち心身の満ち足りた状態をつくることができる。私はこれを「里山ウェルビーイング」(原2025)*と呼び、これからの里山保全活動のテーマとしたいと考えている。このようなことをお伝えした。

*原慶太郎(2025)里山の景観再生と里山ウェルビーイング. 自然環境復元研究, 15:21-26.



運営会議報告

8月度運営会議

日時：8月14日（木）20:00～22:10
会場：オンライン（Zoom）

【報告】

- ・だより164号送付 会員はメール配信
- ・ボランティア体験 28人申込み
- ・若者事業 県との打ち合わせ 7/23
- ・千葉興銀の印旛沼への取り組み 9/27 10/2
- ・千葉市公民館講座 7/23・30・31・8/2
- ・いちはら環境フェスタ実行委員会開催 8/7 他

【協議】

- ・だより165号構成
- ・ちば環境再生基金事業
ボランティア体験その後、SDGs学生フォーラム
- ・会員サロン開設 9/14
- ・若者事業 審査員との打ち合わせ 9/14
- ・理事会開催 9月

お知らせ

第12回 Eボート千葉大会 in 浦安 参加チーム募集中！

日時：2025年11月9日（日）

場所：浦安 境川しおかぜ歩道橋先

ご近所さんで、いつもの仲間で、チームを組んで、是非エントリーしてください。

申込みは10/26まで 20チームになり次第 締め切りとなります。

【チーム参加申込】

<https://store.clearwaterkayaks.com/?pid=188328726>

【個人参加申込】

<https://store.clearwaterkayaks.com/?pid=188333570>

9月度運営会議

日時：9月11日（木）20:00～22:20

会場：オンライン（Zoom）

【報告】

- ・ボランティア体験
- ・若者事業
県との打ち合わせ 8/19
スタディツアーやプロジェクト相談会開催
- ・税務相談 8/19
- ・千葉興銀 9/27 10/2
- ・エコメッセちば2025出展説明会 9/10

【協議】

- ・だより165号構成
- ・ちば環境再生基金事業
- ・会員サロン開設 9/14
- ・若者事業 応募9/8締切り 13団体応募
- ・千葉興銀の印旛沼への取り組み
- ・Eボート千葉大会 11/9 他

環境教育指導者養成研修

（小学生以下への指導を目指す方向け）

森林環境教育プログラム「LEAF」体験講座

日時 令和7年11月12日（水曜日）

9時30分～16時00分

場所 午前：船橋市北部公民館

午後：船橋県民の森

定員 25名（先着順）

対象 主に小学生以下への指導を目指す方
環境学習等に関する活動に興味ある方
等

参加費 無料

申込方法：申込フォーム（ちば電子申請システム）にアクセスし、必要事項を登録

申込期限 令和7年10月30日（木曜日）
(ただし、定員に達し次第終了)

主催：千葉県環境生活部循環型社会推進課

千葉県HP「令和7年度における環境教育指導者養成研修について」を検索

「特定非営利活動法人 環境パートナーシップちば」

環境活動の推進と充実を図るため、市民・団体・企業・行政・学校とのパートナーシップのもと、

「持続可能な開発に向けた目標(SDGs)」や「持続可能な開発のための教育(ESD)」の視点を意識して、さらなる持続可能な社会の実現をめざすことを目的とする。

お問い合わせ

事務局：〒262-0006 千葉市花見川区横戸台21-13 特定非営利活動法人 環境パートナーシップちば

Tel : 090-8116-4633 E-mail : info@kanpachiba.com

ホームページ : <https://kanpachiba.com/>

※会費や会員申し込みなどの情報は上記 HPでご確認ください。